

ISSN 0425-4929

ÉTUDES
DE
LANGUE ET LITTÉRATURE
FRANÇAISES

フランス語フランス文学研究

N° 75

日本フランス語フランス文学会

Société Japonaise
de
Langue et Littérature Françaises

Librairie HAKUSUISHA
Tokyo, Japon

1999

フランス語に於けるパロールから 象徴的意味・前論理的表現への 過程について

三石博行 / Eddy VAN DROM

1. 言語表現の意味的移行現象

言語表現を観察すると、過去の表現方法が時代と共に新たな表現方法に活用される事実に出会う。このことを言語表現の意味的移行現象と呼ぶことにする。言語の通時的性質によってこの現象は生じているのであるが、課題になるのは、一つの表現方法に生じる多様な表現形態の規則性である。

例えば、「Il est arrivé à 5 heures」の「à 5 heures」の表現について考えてみる。「à 5 heures」の「à」は「5 heures」を伴うことによって時間的意味を持つ。しかし「à」はもともと空間的意味であった。しかも、「à」には正確な空間的位置のニュアンスを持つ時間的意味が示されている。この表現形態の変化について分析する必要がある。

2. パロールから象徴的意味・前意識的表現への移行

パロールは快感原則に基づく第一過程で機能している。「コトバ」を発する主体の欲望や精神活動がコミュニケーション可能な「言葉」の論理的表現形態に移行する場合に、それらの無意識の欲動活動は、その方向性つまり意味、sens を生み出す。欲望はその対象を得るために戦略として、文化的規則性と呼ばれる方向・意味、sens の形態化を受け入れる。この第二過程への「コトバ」の移行は、文法や表現形式と呼ばれる言語規則に則して行

われ、欲動的「コトバ」はコミュニケーション可能な公共的「言葉」の形式になる。

夢の中の言語活動を想像してみると、無意識から意識への過程段階に前意識的段階があることが解る。その段階では欲望の対象は必ずしもその「意味するもの」と正確な対応関係が付けられず、寧ろその象徴的な表象に結び付いて登場する。そこで、「コトバ」から「言葉」への過程を可能にするものとして象徴的意味の場を考えた。これを象徴的意味・前意識的表現の場と呼ぶ。

3. 象徴的意味の場のモデル

既に我々はフランス語表現方法に関する実証的研究の中で、論理的表現に関する14の分類を示した。その分類に即して、「à 5 heures」は「Point d'arrivée」の時間を示す論理「C10f」に分類した。また紙面の関係で示すことができないのだが、我々は14の象徴的表現形態に分類された象徴的意味・前意識的表現の場を仮定した。

さて、象徴的意味・前意識的表現の場から移行して「à 5 heures」の論理的表現が形成される過程を考えてみる。14の象徴的表現形態に即して、「à 5 heures」の「à」のもつ時間的意味形態をS10、空間的意味形態をS11、表現全体の意味のもつ肯定的存在意味形態をS14とする。「à」はこれら三つの意味形態の合成であると考えられる。「à 5 heures」の象徴的意味表現から論理的表現への移行は以下のように示すことができる。

$$\begin{aligned} \text{「à 5 heures」} &\equiv (S10 \diamond S11 \diamond S14) \\ &\rightarrow \text{「C10f」} \end{aligned}$$

但し、 \diamond は意味演算子と仮定する。

(金蘭短期大学助教授) / (阪南大学講師)